

## 歩んだ道は ――その主張――

自選自解『阿波野青畝句集』のあとがきより転載

私の生家は大和にあった。

まず生家の思い出を語ろう。

先祖は鷹取藩の微禄を食んでいた。母は百姓出の父を養子に入れた。父よりも年上、その上羨ぶりがきびしく、また倅約家だった。

前栽はいつも芸術品みたいに手入れがよかった。歩くときは必ず備えの竹の皮草履をはかねばいけない。

ある日私は猿のように跳ではねまわった。庭石の高低が面白いから勢よくとんだ。万年青は乱れ万両は折れた。母はこの現場を見て叱ったこと、――今なお思いが消されない。

よく青苔ののった前栽だった。かといって湿地でなく、少し掘れば抵抗する固い固い岩盤があった。

苔のせいで万両は元気。高いのは背よりもすごい。風があるとゆらゆらうごく。

美しくて好きな草花を取ってきても、前栽に植えられない。

万両や万年青が威ばって占領する。

鵜が万両を盗みにくる。代わりに肥料つきの種を蒔いてはくれた。

私と俳句とのつながりには、この万両のような因縁があるかと思う。

中学の友には短歌や詩に熱中したものが多かった。俳句を隠居道楽と軽蔑していた。はじめ私も情熱の啄木が好きで、万葉集とともに愛誦はしていた。

だが俳句に病みついたらもう断念する考えはなかった。

それは使命を感じたからだ。隠居道楽の通俗俳句を文学作品に向上させたい。今の若さの情熱と希望とは俳句でみのらせたい。たしかにそんな野望を掲げ宿命を感じたに違いない。人間の運命を定めるものは出会いである。

私が見ても見えないところに歯車がまわっている。私が一つの歯と噛みあったら出会いで、すなわち私の運命が約束される。

大正六年（1917）高浜虚子師と出会いして私の進むべき方向が決まったのである。

その前に虚子を師表としている原田浜人が私を育てていたから全く偶然ではない。

困った話は、国漢の担任教師の野田別天楼が他系統の俳句をすすめたが、歯車の歯に噛みあわなかったのである。

顧みるにホトギス俳人は当時寥々（りょうりょう）としていた。語るに友なく、ただ孤独のみ。この孤独は私の耳疾にも大きな原因となった。

父は末子の私の将来を心配した

俳句に夢中になればなるだけ、そんなことをやって飯が食えるか、と何回嘆息しただろう。飯が食える、食えないの問題を言われると蛇のごとく嫌った。好きなことはやめられないのだからと父を恨んだ。

俳句は文学であるために低俗な俳句を駆逐することだ。懸賞をつける月並俳句が腹立たしかった。その一面、逆に文学意識過剰の私でもあった。

十七字、この短小詩形は小説の代理にはならぬ。若い客家の私はそのことが合点できずに、ひとりよがりの難解俳句を作った。

虚子師はこれを喜びはしない。詰問に似た私の陳情に師は懇ろに答えた。

「御不平の御手紙を拝見しました。浜人くんからも似通った御手紙をもらひました。しかし私は写生を習練しておくといふことはあなたの芸術を大成する上に大事なことと考へます。今の俳句はすべて未完成でそのうち大成するものだと考へたら腹は立たないでせう。そう考へてしばらく手段として写生の練磨を試みられたならあなたは他日成程と合点の行くときが来ると思ひます。不取敢其だけを御返事と致し置きます。」

これが思いあがりの私を諭した全文である。

良き師を選んだ。良き師との奇しき恵まれた出会いを得たことに心から掌をあわせている。

大正十二年（1923 年）阿波野の姓をおかして都会の大阪に移った。境遇の大変化が起こった。

都会に来て初めて自然が母の如く恋しい。自然を愛する態度の不徹底さを都会に住んで痛く悔した。

処女句集『万両』はいわゆる望郷の自然詩である。都会に住みながら都会詩ではない。

大阪は十露盤の玉の動く都会である。私は角帯をしめた管理人。最も封建主義のもとに入って忍辱の修業をつんだ。

阿野家の養家は徳島県の出、もと香美の姓である。初代の曾祖父は異母弟に家督をゆずり、単身奉公に大阪へ出て商人となった。この人は書画に興味があつて牧溪に垂涎した日記がある。

牧溪の省筆と気品とは、金原省吾の『東洋画論』を読んでから私に深い影響を与えた。その時曾祖父の心を私は感得した。

牧溪の示す簡素は、俳句に共通する問題だと考えた。十七字の形式を生かす途は簡素化だ。複雑を巧緻（こうち）に省略すること。何よりも精神の集中にある。力点の付加である。それを思えば右顧左眄する八方美人の行き方を一切止めよう。

巷間（こうかん）に季題を俳句のレッテルにすぎない扱いをする。季題は圧縮した季節感情、最も簡素なる題と認識しなくてはなるまい。

無季容認とか自由律とか新しい説をいいはじめる世の中に私は耳を藉さない。格を出すにはまず格に入る。格があるゆえに内容深化の可能性はある。こうして自然を愛する情熱をたぎらそうという私の悲願である。

簡素はよく単調や平凡と誤解された。形式の上にあぐらをかいて精神を忘れるから単調になる。古人の跡を求める自慰行動である。

唱えるお題目だけで自然は開扉せぬ。自然に親しむべく写生の修練の必要を感じた。

手段として写生の技をみがいたが、感情的になる私は満足できない。それは根本的に精神である。手段を超えた作家の写生精神を昂揚すべきであると思うからだった。

そもそも、子規が洋行帰りの画生の話から、事実を写す、粉本を避けて描く意味のスケッチを写生と称した。斎藤茂吉は写生の定義を拡張し、実相観入によって生を写すのが写生と説

破した。この飛躍した説に私はおのずから同調しはじめた。

客感写生の修練を虚子師によって琢磨したために、玄々妙々の隠微をもつ自然と肌をふれる歓びを知った。観念の陳腐さをふりかえることができた。そういうとき切に一期一会という意味がわかる。

一回性のわが人生を俳句によって生きる幸福感で充実させられるか、どうかわからないが、いまは自信を持って努力をつづけようとしている。

虚子師は碧梧桐に比して顕著な主観詩人だった。師事のはじめの理由もまたそこにあったわけである。いわゆる商才にろうらくされ追従するような者ではない。

虚子の俳句は好模範で、日々心酔し來たった。この師より抜け出る努力は常に失敗する。失敗を失敗たらしめぬことはやはりけんめいな努力だ。古人の求めたる処を求むべしという目的に向って蠅螂は蠅螂なりの最善の精進をする覚悟をもっている。

私は懷疑を知らぬような人間をあまり興味におかない。

懷疑は悟入の発端をつくる。まわりみちとなってもよい。師説を鵜呑みにする人の不消化よりもその人にとって幸福となる。

夜があるから朗らかな暁に期待があるように、俳句に懷疑があつて当然なのだ。爽やかに解決のある日を待つまでのあいだ焦燥苦悩は貴い経験である。この苦悩は後の悦楽を倍加するものだから。

ともかくにも私の俳句生活が五十年だ。単調ではなかった。俳句を捨てようと思った日もあり、五里霧中でやってもきたが、初めに書いたとおり、狭い苔の間に万両が育ち、その万両が処を得て伸びるがごとく、私の宿命の俳句なる文学がつきまどっていた。

大戦後、作品至上主義より、俳句生活主義に切替えることによって、われわれの日常と自然とをわれわれの伝統の血のつながりであたため、心の楽土を築き上げようと祈念している。